

# 紙から

## 子どもたちに夢を与えたい

今月の表紙の人は、札幌地区青少年育成委員会会長の菅原守也さん(62)です。

菅原さんは、青少年の健全な育成のため、スポーツやお祭りなど地域の行事に子どもたちと一緒に参加したり、暗い公園などの危険な場所がないか巡回したりしています。

「子どもたちに夢を与えたい。この願いを実現するためにどうしたらいいか」。そう考えた菅原さんは、自身の子どもの時代を振り返って、地域でのお祭りが楽しかったことを思い出したそうです。そこで札幌地区の子どもたちにも地域に根差したお祭りを楽しんでもら



「燃えれ！わが街」の様子  
(平成14年8月3～4日)

おうと、地域の方々と「燃えれ！わが街」というイベントを始めました。初めのころは参加者も少なかったようですが、今では毎年多くの子どもたちが集まるようになります。昨年は十周年の節目を迎えました。

菅原さんは、市民自らがまちづくり活動の提案をする場として設置された「東区まちづくり市民会議」の委員として、公園の持つ可能性についても考えました。子どもたちと一緒に公園を活用しようとおととしからは、バードウオツチングや、枯れ枝を使った工作などを行っています。「子どもたちにはもつと外で遊んでほしい。外で遊ぶことによつて体力も付くし、大勢の友達と接して社会性身に付けることもできるのです」と、菅原さんは話します。

菅原さんは、三十年にわたる青少年育成活動により、平成十四年度札幌市社会教育功労者表彰を受けました。菅原さんの熱心な活動はこれからも続きます。



◆ ◆ ◆  
将来の社会を担う子どもたちを育てるには、地域社会の力も必要です。地域の大人一人ひとりが関心を持って、子どもたちの成長を見守っていききたいですね。

# ひがすとりー

## 酪農業の新たな担い手

明治の終りころ、農家による乳牛の飼育が始まります。それまでの酪農業の担い手は、搾乳業者(専ら成長した雌牛を飼って牛乳を生産する酪農経営者)、そして郊外の広い所有地で乳牛を育成し、牛乳やバターを生産する大規模農場に限られていました。こうした二つのタイプに加えて、農家が新たな担い手として登場します。

一九〇二(明治三十五年)年、札幌村大字雁来村の佐藤金蔵が乳牛を飼いはじめます。佐藤は前田農場から子牛三頭と雁来の土地約十一畝を借りました。佐藤は北海道庁監獄署(現在の札幌刑務所)の用務員であり、受刑者が前田農場で作業に従事したこともあったので同農場の人と知り合ったのです。佐藤は苦勞しながらも、酪農経営を軌道に乗せました。付近では佐藤を見習い、副業として乳牛を飼育する農家が次第に増加しました。



佐藤金蔵

第23回

## 村は家畜とともに

### 牛と歩む日々(二)

た。そんな農家が後に酪農業の担い手に成長します。また、佐藤は雇っていた人たちを農家として独立させています。さらに、牧草の生産にも力を入れ、国内でいち早く牧草の流通も手掛けました。

### 牛乳の販路を確保する

明治の終りから大正の初めにかけて、札幌と近郊では乳牛の頭数が増え、牛乳の生産量も伸びます。札幌の人たちの食生活にも徐々に変化が見られ、牛乳も一部の人たちから広まりつつありました。しかし、消費量は少なく、余った牛乳の受け入れ先を確保することが問題となりました。

同じ時期に乳牛の頭数が増えた札幌村でも牛乳の販路確保が問題となります。佐藤らは白石で牧場を経営していた宇都宮仙太郎に相談し、バターの原料用として乳脂肪分(クリーム)を買ってもらうことにしました。そのため、佐藤は牛乳からクリームを分離する機械を家に備え付けます。当時、牛乳一・八リットの価格は十二銭、クリームは五銭五厘。農家は販路を確保することに力を尽くしました。